

六花

2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

10月号

を
尾花折る節を手探りしてをりぬ

と
床の間にこぼれて美しき萩の花

こ
漕ぐ度に芒寄りくる水路かな

も
餅撒きに芒握れる手をふりぬ

す
砂山の砂に芒の傾ける

な
嘗めて子を育てる犬やこぼれ萩

る 流人墓に弾け咲きたる桔梗かな
に 日没の余光に暮るる芒かな
き 樹に絡む雨の真葛の花なりき
と 遠くまで渦を生みゆく芒原
い 椅子軋む音に眠かり萩の庭
ふ 複雑に絡めば匂ふ葛の花
も もてあます程に撫子摘みにけり

を折詰に稲穂添へあり秋収

ととんと音立てて秋思の花瓶置く

こ小刻みに変はる土色秋時雨

も燃え尽くるときを知るかに曼珠沙華

す摺り足の如く虫の音近寄り来

な波立たぬままの秋思を持って余す

るルーレット一人で廻す夜長かな

に 二杯目の新米はしみじみと噛む
き 菊柄の帯ちらちらと秋日傘
と 透明になりゆく我が身涼新た
い 稲光 天が蕾を解く如し
ふ ふつくらと生けられてある芒かな
も 毛氈に白萩零れ散りぬたる
の 農夫立つ澄む天地の芯となり

行く秋の大地を支へ農夫立つ 五ヶ瀬川流一

ゆくあきのだいちをささえのうふたつ ごかせがわりゆういち

秋の田の男の背なに夕日かな

稲の花夕焼空を見上げをり

田の神や秋夕焼の鎌を研ぐ

白秋といへども風の青さかな

大自然の中に溶け込んで生きる人の透明感が漂う。行く秋を惜しみながら鍬の柄を支えに田(畑)で農夫が感慨深く佇んでいる姿が見えてくる。大地を支えているようであり、大地に支えられているような一体感が澄み切っているのだ。この一年の農作業、作物の出来具合を振り返りながら、ひとときを過ごしているのである。あるいは鍬の柄を持っていない農夫の姿でもよい、野太い脚でしっかりと大地を踏みしめながら、感慨深げに立って居ると見てもよい。

祖(おや)から営々と引き継ぎ生き継いできた大地に立っているのだ。

さくらんぼ

松本文一郎

時の日や鎖の長き金時計
尺貫の表示小さく実梅売
梅雨晴間寸暇を惜しむ妻のをり
さくらんぼ白磁の皿に紅の影
若葉風足湯の背なを押しゆけり

短 夜

貝森光洋

短夜を余すことなく眠り切る
なめくじらにやりにやりと歩みおり
助手席も運転席もサングラス
秋茄子の尻のきゅきゅきゅと陽が昇る
法師蟬ひるなお暗き鞍馬山

ぬひぐるみ

梶浦玲良子

新緑に銜とけこむ三姉妹
尺取のたどりつきたるよいと巻け
早口の風をあやして栗の花
蟻地獄口をつぐみしぬひぐるみ
ねむの花つめたき距離に日のかげら

蜘蛛の糸

笹村政子

さみだるる中に水車のしぶきかな
木洩日は滝の湿りを帯びぬたる
錆釜の疵より伸べし蜘蛛の糸
植田から鳥居くぐりて戻りけり
雨垂れの穴のぞき込む羽抜鶏

せつじゆしゆう
雪樹集

涎掛け

志方章子

涎掛け干せば蟻来てをりにけり
島の影我を追ひ越す薄暑かな
灯の点くや否やぶんぶん唸り立つ
五月雨や家の軋める音のして
古墳はや二度目の草を刈られけり

暑中見舞

出口

誠

ひと駅で空きし車内よ大西日
お小言も暑中見舞に書かれけり
あげ底の氷に冷やし中華かな
冷麦の箸持つ手よく上がりけり
鱧の身を皮の寸前まで刻む

蛍雪譚 六甲

尺貫の表示小さく実梅売

松本文一郎

我が国では昭和五十九年の尺貫法廃止が施行されてから以降は尺貫で取引証明に使用することができなくなつた。だが、家屋の和室や畳の間取り、障子や襖、土地の面積など未だに尺貫法に当てはめた方がなにかと便利なので、根強く尺貫法は生活の中に生きている。日本酒を一升酒と言わず一、ハリットルの大酒飲みなどと言つても実感が湧かなぬ。尺貫法がしみ込んでいる買い手と売り手の利便性を考えて尺貫法の表示を、罰せられない程度に小さく表示しているのである。「梅一升に、塩一貫」などと明るい遣り取りが聞こえてきそうだ。なお先月文一郎さんの作品「五月病本郷界隈坂多き」が掲載漏れしていたことをここにお詫びし別ページに再掲します。

短夜を余すことなく眠り切る

貝森 光洋

寝苦しい夏の夜はとうとうとしても熟睡できず、いつの間にか夜明が来ているので、感覚的に夜が短く感じられる。物理的にも太陽の沈んでいる時間が短いので短夜という。寝苦しい夜をたっぷりと寝ることが出来たというのを、余すことなく言った。短夜を効率よく睡眠に

使ったよという満足感なのである。同時句の「助手席も運転席もサングラス」も助手席の方に目を向けた意外性が面白い。サングラスを掛ける必要がないではないかと肩身の狭い思いをしている助手席の姿が見えて微笑ましい。短夜は夢風撰候補。